

第6回山の気象シンポジウム*

日時・昭和37年6月9日(土)午後1時
会場・気象庁第1会議室

プログラム

1. 春の雨飾山の気象 日本女子大 鳥羽裕子
2. 冬の塩見, 赤石岳周辺の気象 富士重工 長谷田茂男
3. 冬の吾妻山の気象 気象庁 大井正一
4. 夏の立山の気象 東京理科大気象研究部
5. 富士山の気象(第5報) 船津測 山本三郎
6. 精密高度計(第2報) 地質調 高橋 博
7. 富士山の気圧変動 気象庁 大井正一
8. 上層天気図の利用法 // 有住直介
9. 映画「南極第3次越冬の記録」

第6回山の気象シンポジウムも第5回と同じ要領, すなわち各方面の成果を集大成するという試みで演題を整理してみた。まず1. 2は大学と職域の山行時の気象報告である。2. の報告中吹きだまり形成の経過は, 今後冬山でのテント設営にあたっては気象条件を充分考える必要のあることを示している。4. の夏の立山の気象は丁度観測期間に大きな気象変化がなかったため, 大きな観測網をひいたわりには収穫が少なかったようである。これは結局チャンスの問題であるから, 今後の成果は期待してよいであろう。5. の富士山の気象は気象条件と登山適否に関する研究で, これは山本氏の一連の研究の1つである。6. の精密高度計は第1報が実験室内でのリレキ現象をみたものであるが, 今回のは実際に使用してみた結果の報告である。7. は直接山と関係はないが, データーのとり扱い方と研究法を, 8. は登山者に必要な上層天気図の解説が述べられている。

< 概要 >

1. 鳥羽裕子(日本女大山岳部): 春の雨飾山の気象
昭和37年3月22日から30日にかけて頸城山塊雨飾山で春山合宿を行った, そのときの気象記録が紹介された。

(討論)

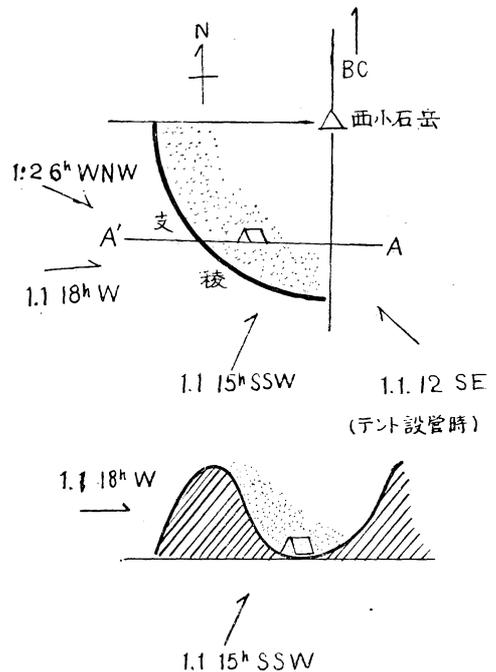
大塚(気象庁) 3月26日は南岸に低があって, 北東気流になっているが, この日の最低は何時に出ているか。

鳥羽 最高最低温度計は1日1回18時にみることにしているので, はっきり何時とはいえない。

2. 長谷田茂男(富士重工山岳部): 冬の塩見, 赤石

岳周辺の気象

昭和36年12月30日から37年1月4日にかけて南ア塩見, 赤石岳で冬山合宿を行った。そのときの気象記録が紹介された。



1月1日, 我々のテントが雪に埋められたが, このときの状況を説明すると図の如くなる。我々がテントを張った所は西小石尾根と支稜の間のやや凹んだ所, はった時はまばらに雪がある程度だった。ところがはじめSEだった風が次第にWに変わりはじめやがて吹雪となった。すると我々のいる所は丁度風W風に対して支稜の風下となるため吹きだまりが出来, テントは埋められた。テントを掘り出したとき計ったら約2m半あった。

(討論)

広瀬 テントが埋められたときの風速は。

長谷田 大体20m, ときには30m位にはなっていた。

庄司(気象庁) 1月1日の天気悪化のときは, 雪が降ってからガスがかゝたか, またはガスがかゝってから雪が降ったか, またその雪は乾燥していたか, 湿ってい

* The sixth Symposium for Mountaineering

たか。

長谷田 チラチラ雪のときはガスはなかった。その中だんだん視界が悪くなってきて吹雪となった。雪質は大分湿っていた。雪洞を掘るときも割合掘りよく崩れなかった。

3. 大井正一（気象庁高層課）：冬の吾妻山の気象

昭和36年12月28日出発、37年1月2日帰京。コースは福島—高湯—ぬる湯—吾妻山途中までの往復、この間の山行と気象をスライドで説明。

（討論）

秋川（文京九中） 濃巻雲で前線とわかるのはどんなときか。

大井 巻雲がすじ雲のようなときは前線性ではないが、一様なひろがりをもち一線を画して現われるときを前線性とした。

秋川 巻雲だけとすると地上の寒線とは違うのか。

大井 山の東側では、弱い寒冷前線の場合山を越えて低い雲は出来ないとと思う。

4. 東京理科大学気象研究部：夏の立山の気象

昭和36年7月、東京理科大学気象研究部は読売新聞社と共催で、富士气象台、富山大学、その他地元の高校、中学の協力をえて、立山周辺で共同観測を実施した。観測は山岳地帯の美女平、弘法、天狗平、追分、室堂、浄土山、五色ヶ原、剣御前の8カ所で行った。期間は7月22日0時から25日0時まで、この期間の観測を整理した結果、この期間には顕著な気象変化はなく、たゞ海陸風、山谷風の日変化の細かいことがわかった。海陸風は平野部の上滝位まで入り、山谷風は普通美女平から室堂付近までで、時々剣御前まで入ることもある。天気の良い日は普通夜は山風、昼は谷風だが、天気の悪いときは谷風がつづく、そして尾根の上では常に上層風が吹くことがわかった。

（討論）

大塚 23日夜から24日にかけて天気が悪かったが、そのときと天気のよかったときでは山谷風に顕著な差があったか。

矢部 なかった。

5. 山本三郎（船津測候所）：富士山の気象（第5報）

前に富士山の気象条件と登山の適否について発表した。それをみると70%適の日があるのは、4、5、11月であった。しかしこれは平均であって年によっては違う。

今回はこれと気圧配置との関係を見た。その結果、冬の期間の登山の率は西高東低205の中65%、移動高139中

94%、日本海低58中28%、南岸低29中28%、二つ玉低14中14%、本邦上前線7中14%となった。

また気温が上りつつあるときと、下りつつあるときでは登山条件が全然異なる。下りつつあるとき登ると減率と気温自身の下りが加わってその差は24°に達することもある。気温が高く風も弱く登山に絶好のチャンスといえ、低気圧が西の方に発生して崩れかゝる前面しかない。しかしこのときは一步誤まれば悪天にぶっかるおそれがある。

富士山にかゝる巻雲と天気の関係を調べた結果（昭和31～35年統計）、天気悪化の予想が当たったのは、冬36回中69%、春49回中78%、夏27回中75%、秋31回中77%となった。

（討論）

大井 天気悪化するときは風速計に氷などがついて風が弱く出るといったが、実際にも弱くなるのではないか。

山本 弱くならないときもあるが、大がいは弱くなる。

6. 高橋博（地質調査所）：精密高度計について

第4回シンポジウムで報告した精密高度計を今回は実際に山でテストしてみた報告である。市販の高度計であるとリキ現象がはつきり出るが、この精密高度計ではかなり少ない。しかし大気気圧自身にも変動があるし日変化もある。低気圧や高気圧の通過による何日週期かの変化もある。1例をあげると次のようになる。

	高度補正合計	気圧変化	気圧配置
1960年10月19日	+10m	-15mb	高気圧圏内
10月22日	+4	-16	〃
23日	+10	-18	〃
24日	0	-6	〃
26日	+36	-54	台風25号南方から接近
27日	-2	-6	〃 南方に去る
28日	-18	+21	高気圧西より張出す

7. 大井正一（気象庁高層課）：富士山の気圧変動

富士山の気圧変化曲線を毎時、2、3、4、6、12時間ごとにそれぞれ画いてみると、相当違ったものになる。しかし深い気圧の谷が通過するときなどは、いずれも同じような曲線を示す。各時間おきの変化量をみてみると、2、3、4時間ごとのものは大体同じように増加するが、だんだん時間間隔が長くなると打ち消される量が出てきて、8時間間隔が極大、それ以上になると小さくなって

くる。気圧は上るときはゆっくり、下るときは急という性質がある。大体上るのに20時間かかったとすると、下るときは10時間位というのが1つの目安である。

8. 有住直介(気象庁予報課): 上層天気図の利用法
上層気天気図の見方と解説

昭和37年はこの他、以下に述べる研究会例会が開催された。

○第11回山の気象研究会例会

昭和37年9月14日(金)午後6時
気象庁第1会議室

1. 夏の北アルプスの天気分布
日大山岳部OB 菅原省司
2. 山岳気象放送について 気象庁 中村 繁
3. 文献紹介「冬季 Milešovka における粗水の形成について」
気象庁 奥山 巖
4. 超高層天気図の話 気象庁 大井正一

○第12回山の気象研究会例会(雪崩遭難体験者を囲んで)

昭和37年11月30日(金)午後5時

気象庁第1会議室

1. 北ア涸沢の雪崩 日大山岳部OB 菅原省司
2. 北ア北鎌沢の雪崩 専大 杉沢博明
3. 35年11月の富士山の雪崩
元アルピニスト教室 和田達雄
東京理科大 竹原祐爾, 百瀬常剛
慶大医学部 和田孝雄
4. 討論会

○第13回山の気象会例会(今冬の遭難の検討)

昭和38年3月8日(金)午後6時
気象庁第1会議室

1. 38年正月の気象
(1) 南アの気象 富士重工 菊地和夫
(2) 八方尾根の気象 気象庁 田中正一, 増田次夫
2. 今冬の遭難と気象 気象庁 官内駿一
3. 富士山のデーターの使い方 気象協会 大塚竜蔵
(文責, 奥山)

九州支部だより

気象懇話会順調に発足知識の交流に寄与

学会支部と福岡管区気象台との共催として、“気象懇話会”が正式に発足したのは5月31日であった。この動機については、“支部だより No. 15”に掲載されたとおりであるが、さらに同誌の“気象学全般の広報を望む”と題した沢田理事の論説の中にも同じような主旨が述べられている。31日福岡管区気象台の台長室で初めて気象懇話会を開いたところ、予期以上の人が集り、会員はあとからの追加もあって現在33名に達した。この会のおもな内容である文献紹介については、原文または訳文のプリントを事前に全会員に配布するようにしたので、討論がかなり容易になった。まず、この会の推進者の一人である土井理事によって文献紹介が始められた。

その後、回を重ねるにつれて、この会もようやく軌道

に乗った感じで、現在まですでに3回の催しがあった。また、会場は気象台にかぎらず九州大学でも行なった。このことは会員の親睦、交流という点でも大いに役だっているようである。特に、第3回の催しのあとでは、沢田理事の説明で理学部の大気モデル実験室を見学するなど、思わぬ機会に恵まれ喜ぶ人もあった。また、今まであまり気象台に行くことのなかった人は、この機会を利用して気象資料を写したりしていた。

懇話会は毎回活発な討論が行なわれたが、これまでの文献はいくぶん程度の高いが多かったせいもあってか、また討論は会員全体に十分納得できるまでには至らないようである。また、紹介者のプリント作成に費やす労力もかなり負担になっている。将来はこのような点で少しずつ改善してゆく必要を感じている。

(360頁よりつづく)

5. 朝日賞に関しては今回は見送る。
6. 秋季大会中今井理事がニュージーランドにおけるWMOの熱帯気象シンポジウム出席不在のため神山理事が代行する。